

論文の内容の要旨

論文題目 雨の詩人 陸游 ―その作品と生涯―

氏 名 三 野 豊 浩

本論は、南宋を代表する詩人陸游（1125－1210）に関する論考である。全体は第一部と第二部から成り、前者は陸游の生涯について、後者はその作品について考察する。陸游は一般に「偉大なる愛国詩人」として認識され、特に現代中国においては、この観点から論じられる傾向が顕著である。本論は、陸游の作品と生涯に、二つの視点からアプローチし、従来とは異なる陸游像を呈示せん試みるものである。

第一部「陸游と范成大の交流」は、陸游とともに南宋を代表する詩人である范成大（1126－1193）との交流を軸に、陸游の生涯をたどる。二人は、淳熙二年（1175）六月から淳熙四年（1177）六月までの約二年間、蜀の成都において親しく交わり、作品を応酬した。本論は、この期間を「成都時代」と呼び、この時期を中心とする二人の交流と友情の実態を考察する。

第一章「成都時代以前の陸游と范成大」

本章は、成都時代の始まりまでを概説する。二人が間もなく四十歳を迎える頃、陸游と范成大は、共通の友人である周必大を通じ、臨安で知り合ったと推測される。陸游が臨安を離れる際、范成大は陸游のために送別の五言律詩二首を贈る。その七年後、夔州に向かう陸游と金の都に向かう范成大は、鎮江で再会する。さらに五年後、范成大は成都に太守として赴任し、榮州にいた陸游を自分の幕府に招く。

第二章「成都における陸游と范成大」

二人が成都で再会した淳熙二年（1175）には、まだ本格的な応酬は確認できない。淳熙

三年（1176）春、陸游は奔放な七言古詩「錦亭」を書き、范成大を讚美している。同じ頃、陸游は范成大の小詩集のために序文を執筆する。しかし、ほどなく陸游は幕府の参議官を辞職する。理由は不明であるが、范成大の幕府における陸游の放埒な言動に一因があった可能性が高い。秋になり、陸游は祠禄（宋代特有の恩給）を受け、曲がりなりにも官吏としての身分を取り戻す。そうした背景の下、陸游は范成大の七言律詩六首に唱和し、またこの頃から「放翁」と号するようになる。淳熙四年（1177）春、范成大は大病をわずらい、生死の境をさまよう。陸游は范成大を見舞いに訪れ、唱和の詩によって激励する。夏、范成大は成都を離任し、帰郷の途につく。陸游はこれを見送り、磁姥巖まで同行する。送別の道中は、二人の応酬の最後のピークとなる。

〔補論〕「淳熙三年の陸游の経歴に関する小考」は、陸游が参議官の職を辞した淳熙三年（1176）、台州崇道観の祠禄をうけた時期に関する論考である。清・銭大昕以来、陸游が六月に祠禄をうけたとする年譜が多く、ほぼ通説となっているが、六月とする根拠は実はきわめて薄弱であり、むしろ秋（九月）になってから祠禄をうけたとする欧小牧・市河寛斎らの年譜が正しいと筆者は考える。成都時代の二人の交流を考える上で、避けて通れない問題なので、補論として加えた。

第三章「成都を離れた後の陸游と范成大」

この時期は、言わば成都時代の余韻である。陸游と范成大の政治的な立場の違い、地理的な隔絶、陸游の失脚、范成大の病気など、さまざまな理由が重なり、二人の交流は沈滞してしまう。淳熙八年（1181）、范成大が建康の太守となった時、陸游は詩を贈っているが、これに対する范成大の応答は残されていない。紹熙四年（1193）、范成大が世を去る前後に、陸游は范成大を追悼・追懐する作品を集中的に書き、また最晩年にも成都幕府の思い出を綴っている。こうしたことから陸游にとって范成大は忘れ難い知己であったことがわかるものの、この時期は詩歌の応酬が陸游からの一方通行となっている感がある。

第三章「陸游・范成大と楊万里の交流」

本章は、淳熙五年（1178）から紹熙五年（1194）までの陸游・范成大と楊万里（1127-1206）の交流について概説する。楊万里は、陸游・范成大とともに、南宋三大詩人と言われる。范成大と楊万里は科擧の同年合格の間柄であり、陸游と范成大の交流が沈滞している時期、楊万里は范成大との唱和を重ねている。こうしたことから、成都を離れた後の范成大は、陸游よりもむしろ楊万里を文学の友としていた可能性が高い。以上を要するに、陸游と范成大の間には一定の距離があり、唐の元稹と白居易のような一蓮托生の親友にはなり得ていない。しかし、陸游と范成大の唱和からは人口に膾炙した名作が多く生まれているのに対し、范成大と楊万里の唱和は、おしなべて儀礼的で面白味に欠ける。官僚としての地位、政治的主張、さらに個性も大きく異なる二人の詩人が、心を開いて交流したからこそ、後世に残る作品が生まれたとも言えよう。陸游と范成大の関係は、やはり友情と呼ぶにふさわしいものだったと考えられるのである。

第二部「雨の詩人 陸游」は、陸游の雨の詩を考察の対象とする。吉川幸次郎・小川環樹の両氏が指摘するように、陸游には雨の詩が甚だ多い。しかし、その具体的な分析は、若干の例外を除き、これまであまり行われることがなかった。ここでは、陸游が特

に好んでうたう夜の雨を中心に、その特色を探り、陸游にとって雨をうたうことの意味とを考察する。

序章「陸游以前の詠雨詩」

雨は、古来人類にとって普遍的な自然現象であり、雨をうたう詩は中国最古の詩集『詩経』にすでに見える。しかし雨の詩は、いつの時代も同じだったとはいえない。中国歴代の詩歌に於いて、雨がどのようにうたわれているかを概観する。

第一章「陸游の夜雨詩 一雨を聴く一」

「夜雨」という表現が、初めて詩語として用いられるのは、六朝時代後期である。南朝梁・何遜の「夜雨 空階に滴る」という句は、後に多くの詩人たちに愛好され、数多くの模倣・翻案を生むが、当時としては類例のないものであった。夜の雨を詩にうたうことが一般的になり、「聴雨」「聞雨」という表現が用いられるようになるのは唐代以降である。陸游は、嘉泰元年（1201）故郷山陰で作った「夜雨」の冒頭で、「吾が詩 篋笥に満つ。最も多きは夜雨の篇。」とうたっている。本章は、陸游の夜雨詩を三つの段階に分けて検討する。第一期は、詩人の40代から蜀での生活を終え東に帰る55歳頃までの時期であり、その詩は悲壮慷慨を主調とする。この時期には、雨を自覚的に聴くという主題は、まだ明確に打ち出されていない。第二期は東に帰ってから、淳熙十六年（1189）春、礼部郎中に昇進するも、11月に失脚して帰郷するまでの時期であり、慷慨は沈静の方向に向かい、一人静かに夜の雨音に耳を傾ける、という主題が、繰り返しうたわれるようになる。名作「臨安に春雨初めて霽る」が作られるのも、この時期である。第三期は、紹熙元年（1190）から世を去るまでの時期で、基本的に第二期の延長であるが、長く続く閑居生活の中、雨に導かれる省察はさらに深まり、内容・形式ともに多様な展開を見せる。

第二章「『夜雨滴空階』考」

本章は、第一章から発展して、何遜の名句「夜雨滴空階」の受容の歴史をたどり、陸游詩における「空階」および「点滴」の表現について考察する。雨だれを意味する「点滴」は、人のいない階段を意味する「空階」に伴って用いられる場合が多く、陸游の夜雨詩にもしばしば見える。何遜の詩句の模倣は六朝時代にすでに見えるが、初唐・盛唐には模倣の対象とはならず、中唐に至って復活し、晩唐には詞にもうたわれるようになる。宋代に入っても、北宋の蘇軾、南宋の范成大などに「空階」の用例がある他、宋词にも用例が見える。何遜の句が描くのは、親しい友との別れを惜しみ、夜通し続けられる送別の宴、その間中、夜の雨は石段に滴り落ちるといった情景である。後世この句を継承した詩人たちも、そのほとんどは別離の悲しみ、もしくは友や恋人が今ここにいないことの悲しみを「空階」に託してうたっている。陸游もまた何遜の名句を絶賛する一人であるが、陸游の詩における「空階」「点滴」には、憂愁のきわみより発する憂国の情をうたうという傾向が顕著であり、このことが陸游の詩を他の詩人たちの作品と区別する大きな特色となっている。

第三章「孤村の風雨」

陸游には、風を伴って激しく降る雨を描いた詩も数多い。「風雨」は『詩経』に用例が見

え、六朝の時点ですでに用例は数多く、唐代・宋代には、枚挙にいとまがない。本章は、陸游 68 歳の時、故郷の村で作られた「十一月四日風雨大いに作る」において、激しい「風雨」の描写とともに「孤村」の語が使われていることに着目し、「風雨」と「孤村」の関係を考察する。

「孤村」は隋の煬帝以来、唐詩に多くの用例があるが、旅人の眼に映じた寂しい村の風景に使われるのが常であり、宋代にもこの用法が継承されている。それに対し、この語を自分の静穏な生活の場に対して用いたのが、成都在住時の杜甫であった。陸游にも、旅中の景として描いた「孤村」の例は少なくないが、故郷山陰を「孤村」と表現するものが多い。これは杜甫に学んだものと思われる。しかし陸游の「孤村」は、寂しいが世俗を離れた静かな喜びに満ちた場所という杜甫の用法から出発しながらも、次第により厳しい孤独と対峙する場へと変化していく。その極致ともいえるのが「十一月四日風雨大いに作る」である。

「孤村」が「風雨」とともに描かれた例は陸游以前にはないが、陸游にはこの詩に先立って例があり、暗い雨が立ち込める「孤村」の景もある。これも陸游以前に似たものがない。このことから、「孤村」の含意を変貌させたものは、雨だったのではないかと筆者は考える。杜甫の詩に学びながら、陸游は「孤村」の静穏な生活を心静かに楽しむことができない。その葛藤が、激しい風雨とともにある「孤村」の景を描きだし、陸游の心中にあるものに次第に明確な形を与え、ついには「孤村」を厳しい孤立の場とする陸游固有の表現を生んだのではないか。「空階」は本来雨とともにあるものだが、雨が陸游の心に潜むものを明らかにし、その意味を変容させたという点では「孤村」と同様ではないかと思われる。

以上のように第 2 部第 1 章では、陸游が夜の雨音に耳を澄まし、その省察が次第に陰影を深める過程を見た。第 2 章と 3 章では、雨とともに描かれることで、詩語は伝統的な用法を離れ、陸游独自の表現が生まれたのではないかと推論した。陸游は雨に助けられ、その心と向かい合ったという意味で、まさに「雨の詩人」だったのである。

[t1]